様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　5　月　19　日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２０２３１
研究課題名（和文）　19 世紀後半の英仏文学と戦争報道に関する比較研究
研究課題名（英文）　Comparative Study on Literature and War Coverage between Britain and France in the Second Half of the 19th Century

研究代表者
中島　廣子（NAKAJIMA HIROKO）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40047379

研究成果の概要：19 世紀後半のイギリスとフランスにおける文学と大衆ジャーナリズムとの相関関係を、特に戦争報道という側面から比較検討することを目的とし、クリミア戦争期からボーア戦争期までを対象に、ヨーロッパ内部での戦争と植民地戦争とに分けて考察を加えた。その結果、この時期の両分野の関りは、帝国意識の高揚にあずかって、近代国民国家形成期における特異な現象のひとつとして、様々な「近代神話」形成に寄与したことが判明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	2,000,000	0	2,000,000
２００７年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００８年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	3,600,000	480,000	4,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学
キーワード：19 世紀英仏文学・ジャーナリズム・戦争報道・普仏戦争・ボーア戦争・国民国家・帝国主義・ナショナリズム

１．研究開始当初の背景

（１）19 世紀後半における英仏文学の読者層の驚異的な拡大は、ジャーナリズムの発達と分かち難い関係があるとされるが、両者が大衆の関心を惹くための最も有効な手段がセンセーショナリズムに訴えることにあった。ただし、この点に関する従来の研究は、主として犯罪やスキャンダル等の要素をからめた考察であった。だが、当時、近代国民国家形成期にあった西洋列強は熾烈な覇権争いを繰り広げており、そこから生じた「戦争」というテーマほどこの目的にかなったものはなかったと考えられる。そこで、こうした問題を通じて、一般の歴史研究とは異なる大衆文化の観点から、一時代の英仏文学を問い直す必要に迫られていた。

（２）上記の観点から、本研究の代表者と研究分担者はともに 2002 年度から 2004 年度にわたる科学研究費補助金の支給による「情報社会の黎明期における日英仏の大衆紙比較研究」[基盤研究(B)研究代表者　土屋礼子]に加わり、パリ・ロンドン・東京・大阪という主要都市を背景に、19 世紀末の日本・イギリ

ス・フランスにとってエポック・メーキングな意味をもった清仏戦争・日清戦争・ボーア戦争に関する大衆紙の報道と文芸への影響について比較分析を行ってきている。その結果、これら三国では、マスメディアの発達と情報の民主化を経験するが、それは国民国家による対外戦争において大きく進展したことが裏づけられた。

（3）だが、西洋近代国家の二大先進国であったイギリスとフランスでは、明治維新と文明開化を待たねばならなかった日本とは事情が異なり、いち早くこうした現象が現れており、よって英仏両国間で対象期間をさらに拡大し、19 世紀中葉までさかのぼって論じるべきであるとの認識に達していた。

２．研究の目的

（1）イギリスとフランスの国民国家形成期は活字メディア発展期ともオーバーラップしており、両国における文学と新聞雑誌間の勢力の拡大抗争と相互依存の状態の中で、大衆が共通して関心を示した「戦争」という題材をめぐる言説を分析することで、同時代のヨーロッパ二大先進国の文学的・文化論的特性の共通性と差異を明らかにすることを目指した。

（2）19 世紀後半の英仏両国における「戦争」というテーマに関しては、従来は多くの場合、歴史の領域で扱われてきていたものである。他方、文学の領域では個別研究で言及されるケースはあったものの、一時代の文学を総合的に分析する指標とされることは稀であったため、こうした手薄な領域を補う研究となるよう努めた。

（3）分析対象とする時代における「戦争」を、近代国民国家の神話形成の場としてとらえ、これを文学作品との関わりにおいて考察しようとした。

３．研究の方法

（1）19 世紀後半の英仏文学と大衆ジャーナリズムの相関関係を考察するという研究目的達成のため、研究代表者（中島廣子）のもとで、フランス文学・文化学関連は中島廣子が、イギリス文学・文化学関連は田中孝信が研究を分担することとし、それぞれ、本研究に関わる過去の業績である学位論文・著書・訳書をはじめとし、前述の科学研究費補助金による研究成果を踏まえ、発展的内容となるよう努めた。

（2）研究対象範囲を、初めての近代戦争と呼ばれているクリミア戦争および普仏戦争のようなヨーロッパ内部での戦争と、植民地獲得競争の表れとしてヨーロッパ外部で行った戦争とに分類し、二つの異なる視点から分析を加えることにした。

（3）考察対象は、ヨーロッパ内部での戦争や海外遠征に加えて、これらを誘発したと想定される英仏両国における政治的・社会的動向にも注目し、同時代の新聞・雑誌・広告等に見出される関連トピックスを抽出し分析した。その結果を、当時の文学作品と対照しつつ、英仏両国間で比較検討した。

（4）研究実施のため、対象となる文学作品のテクストはおおむね所属研究科で整備されていたが、報道関連の資料については、前述の科学研究費補助金の助成による収集品を活用しつつ、それらではカバーしえない資料の追加や、対象時期の拡大に伴う新たな調査・収集を行った。それを遂行する第一段階として、研究初年度は報道関連の基礎的資料の購入をはかり、フランスの『プレス』、『シエークル』、『イリュストラシオン』（追加分）、イギリスの『デイリー・グラフィック』、『グラフィック』、『ブラック・アンド・ホワイト』等のマイクロフィルムを入手した。また、フランス国立図書館にて『デバ』、『モニトゥール』など数紙を閲覧した。それらをもとに基礎的データの抽出範囲と整理方法について検討し、比較分析の指標の設定基準を決定し、「近代国民国家の神話」を軸とすることにした。第二段階では、フランスの『プチ・ジュルナル・イリュストレ』、『プチ・パリジャン』、『ジュルナル・イリュストレ』、イギリスの『イラストレイティド・ロンドン・ニューズ』（追加分）のマイクロフィルムを購入したうえで、大英図書館でも『ファン』、『グラフィック』、『ジュディ』など数紙を閲覧した。さらに最終段階でも、必要ながら欠けていた資料を補足するために、再度、フランス国立図書館に赴き、『モンド・イリュストレ』など数紙を閲覧し、最終的な研究のとりまとめを行った。

４．研究成果

（1）ヨーロッパ大陸内での戦争のうち、クリミア戦争に焦点を当てた場合、第二帝政初期の厳しい言論統制下にあったフランスの出版界では、大衆の関心が東方やロシアへ向いてきたことに注目し、かつ自国から遠く離れた地域での戦争であるという事情も重なり、戦場での困難を極めた現実を十分に実感し得ないまま、戦争特需的な発想でとらえる姿勢が顕著であった。すなわち、ラマルチーヌやユゴーをはじめとし、神秘的幻想世界を好んで描いたネルヴァルのような文学者に至るまでが、これを好機として自らの著作を売り込みたいとの意図が共通して認められ、

新聞紙上での出版広告からもこの傾向がはっきりと読み取られた。
　こうしたフランスでの流れに対し、イギリスでは行政改革の遅れを批判する風潮が認められるなど、両国間での落差が確認された。またイギリスの場合、クリミア戦争は日刊新聞に詳細に報じられた最初の戦争であり、『タイムズ』紙に掲載されたウィリアム・ラッセルの記事は一般大衆に鮮烈な印象を植え付けた。だが、そこに用いられているのはもっぱら国内問題を取り上げたリアリズム小説の方法と価値観なのである。したがって戦争記事そのものが、ナポレオン戦争時に見られたロマンティックな英雄譚的な要素を帯びていないことが分かる。チャールズ・キングズリーのような作家はクリミア戦争に霊感を受け英雄的行為を扱った小説を書いたわけだが、それは時代の精神から完全に逸脱したものなのである。その背景の一つとして、政治の流れが対決から交渉と妥協へと変化したことが挙げられる。
　しかしながらその一方で、英仏両国において、ナポレオン神話の復活や英雄的兵士像への賛美を通じて、後の国民国家ナショナリズムと結びついてゆく共通点がうかがいとれたのも事実である。

（2）同じく、ヨーロッパ大陸内での戦争の代表例として、普墺・普仏戦争があげられるが、クリミア戦争の場合と異なり、自国の領土が戦場となった普仏戦争に対するフランスの反応には全く異なったものがあった。特に普仏戦争での屈辱的な敗北と領土割譲、さらにはその後の内乱が引き起こした深刻な後遺症が長期にわたり影を投げかけたことが、報道の分野のみならず、世紀末文学にも色濃くうかがわれた。アルフォンス・ドーデ、エミール・ゾラ、ギ・ド・モーパッサン、ユイスマンスらが記した一連の「戦争もの」とでも呼ぶべき作品群はもとより、彼らに次ぐ世代の作家であるエレミール・ブールジュたちの著作にも同様の特徴がうかがわれた。そして、輝かしい近代文明の産物であったはずの科学技術を駆使したプロイセンの圧倒的な軍事力に屈した反動として、フランスでは文化的側面を重視する方向に大きくシフトしていった点に特徴があった。つまり、「科学的野蛮帝国」ドイツと「文化大国」フランスという対立的イメージを広く浸透させようとしたのである。それは、敗戦から十年もたっていない、1878 年のパリ万国博覧会について記したエミール・ゾラの探訪記事をはじめとし、青少年向けの図書として書かれたジュール・ヴェルヌの小説『ベガンの五十億の遺産』にいたるまで、様々な例があげられる。さらに、世紀転換期にかけてこの傾向はいっそう加速化され、対外経済戦略にまで「文化信仰」を前面に掲げるなど、官民あげての動きが見られた。そうした発想が、アール・ヌーヴォー芸術やデカダンス文学の特徴的な傾向とも見事に重なり合っており、デカダンス作家の一人であるラシルドの小説『自然からはずれたものたち』に象徴的に描かれていることを指摘した。
　これとは反対に、自国が戦場になるといった体験を経なかったイギリスでは、経済優先の発想が優位を占め、その点で英仏両国間に極めて大きな差異が生じていることが分かった。

（3）軍隊組織のあり方をめぐっても、英仏両国の隔たりは大きく、それが戦争報道のあり方や文芸作品への影響を左右する事実を確認した。つまり、徴兵制度をとるフランスと、志願兵制度をとるイギリスといったように、兵隊募集の制度に決定的な違いが存在するからである。
　フランスにおけるケースでは、伝統的な「農民兵士の神話」の継承が、植民地拡張政策を遂行した第三共和制の確立と平行して見出される。たとえば、ブールヴァール劇や大衆小説に「軍隊もの」とでも言うべき作品が目立ち、それも植民地戦争をめぐる時事的な話題が盛り込まれているところに特徴があった。ことに職業軍人であったピエール・ロチの『氷島の漁夫』をはじめとする一連の小説にその典型的な例が認められた。そこでは、徴兵制度のおかげで、無名の庶民が青春の一時期を家族や恋人たちから引き離され、故郷を後にして、植民地戦争の前線に送り込まれる悲劇を題材にしており、こうした「名もなき英雄」たちのドラマを語り継がれるべきものとして文学作品に織り込んだ功績の故、大衆という読者を獲得しえたと考えられる。
　イギリスにおけるケースでは、志願兵が入隊体験により立派な市民へと成長を遂げるといった類の、「理想の兵士神話」が形成され、文壇にも流布していったことがうかがわれた。

（4）植民地戦争については、英仏両国において、西洋文明・人種の優位性誇示の姿勢が前面に押し出されていることは言うまでもないが、場合によってはセポイの反乱に代表されるように、「逆侵略の恐怖」にさらされることもあり、イギリスにおける異人種観の特異さが浮き彫りになった。帝国主義的な侵略という現実がもたらしたこの反乱は、イギリス人が標榜する自由主義がいかに浅薄で脆いものであるかを暴き出したのである。セポイの反乱はキリスト教的軍国主義（Christian militarism）を生み出し発達させる。これは、海外での軍事行動と国内で当

然視されていた道徳規範との間の溝を埋めようとするものなのだが、たんなる一時しのぎにすぎず、本質的には疑わしい解決策でしかなかったのである。

さらに、英仏両国では、東洋に対しては理解不能な神秘のイメージに基づく「異国趣味」も強調されてゆき、それらが報道や新聞広告を通じて大衆層に浸透していった点を追跡し、時には国民国家形成という国家戦略までも密かに蚕食してゆく有様を解明してみた。そして、こうした現象が文学分野にも大きな影響を及ぼし、それぞれ神話化されて描き出されていることを、キプリングやヴェルヌはもとより、耽美的な文学者らの作品にいたるまで、それぞれの具体例に基づいて検証を行った。

（５）19 世紀後半のイギリスを概観した場合、自由主義の時代、軍人としての伝統的な価値は多くの作家や読者にとってほとんど意味のないものであったことが分かった。ウィーダやカーライルが軍隊を支持する姿勢を打ち出したが大きな声とはならず、逆にギャスケルやエリオットのような女性作家たちは軍事上の問題に関心を示さなかったし、ディケンズの小説にはより歴然とその傾向が見られる。

しかしながら、英仏両国における 19 世紀最後の 20 年間、帝国主義の高まりや、女性の進出への反動として、軍国主義の驚くべき復活が見られる。文学はそれを反映し、かつそれに貢献しているケースも多々ある。ハーディは兵士像に再び光を当てた。そして、世紀末のジンゴイズムあるいはショーヴィニスムと呼ばれる大衆の好戦的愛国主義はボーア戦争時に最高潮に達し、国民は人種・国家・帝国に関する近代神話を背景にした新たな視点を獲得することになり、第一次世界大戦の悲劇への道程が定められることになる。

（６）研究代表者は、分析対象とする時代における「戦争」を近代国民国家の神話形成の場としてとらえ、文学作品とのかかわりにおいて考察を加えた成果を、比較神話学の国際共同研究組織の論集 *Mythes, Syomboles, Langues*(『神話・象徴・言語』)や *Mythes, Syomboles, Cultures*(『神話・象徴・文化』)に投稿し、大阪市立大学文学研究科紀要『人文研究』に依頼原稿として寄稿した。さらに、フランス文学関連の学会で口頭発表を行ったりしてきた。

また研究分担者は特に、一見均質的な国民国家像が孕む〈異質なもの〉の存在に、「戦争」と階級的他者および人種的他者のかかわりという観点から洞察を加えた成果を、大阪市立大学文学研究科紀要『人文研究』に投稿したり、イギリス文化関連の学会で口頭発表を行ったりしてきた。

さらに、以上の成果をまとめて単行本として出版する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５　件）
①中島廣子、「フランス世紀末文学にみる普仏戦争のトラウマ―ラシルドの『自然からはずれたものたち』をめぐって―」、『人文研究』、60 巻、35-53 頁、2009 年、査読無（依頼原稿）
②田中孝信、「ボーア戦争における兵士像―表出する<異質なもの>―」、『人文研究』、60 巻、110-124 頁、2009 年、査読有
③中島廣子、「ピエール・ロチにおける農民兵士の神話」、*Mythes, Syomboles, Langues*(『神話・象徴・言語』)、1 号、167-178 頁、2008 年、査読無
④田中孝信、「四つの署名におけるオリエントの誘惑」、『人文研究』、59 巻、98-110 頁、2008 年、査読有
⑤中島廣子、「クリミア戦争期のフランスのメディアと文筆家たち」、*Mythes, Syomboles, Cultures*(『神話・象徴・文化』)、3 号、525-544 頁、2007 年、査読無

〔学会発表〕（計　８　件）
①中島廣子、「世紀末の日英仏における報道と文学―フランスの事例について」、大阪市立大学フランス文学会、2009 年 3 月 22 日、大阪市立大学
②田中孝信、「世紀末の日英仏における報道と文学―新聞広告とボーア戦争」、大阪市立大学フランス文学会、2009 年 3 月 22 日、大阪市立大学
③中島廣子、「フランス世紀末文学にみるアール・ヌーヴォー的モチーフ」、大阪市立大学大学院文学研究科、2009 年 3 月 3 日、大阪市立大学
④田中孝信、「ギャスケル文学とスピンスターたち―スピンスターと女性たちの連帯」、日本ギャスケル協会、2008 年 5 月 31 日、実践女子学園
⑤中島廣子、「ピエール・ロチにおける農民兵士の神話」、大阪市立大学フランス文学会、2007 年 9 月 16 日、大阪市立大学
⑥田中孝信、「ギッシングはミソジニスト？―男たちの戸惑いと抗い」、市大英文学会、2006 年 12 月 2 日、大阪市立大学
⑦田中孝信、「ボーア戦争における兵士像―ジェイムズ・ミルン『アトキンズの書簡』を中心に」、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、2006 年 11 月 18 日、神戸女学院大学
⑧中島廣子、「フランス十九世紀後半の活字メディア研究(1)第二帝政下の戦争報道と文

学」大阪市立大学フランス文学会、2006 年 9 月 23 日、大阪市立大学

〔図書〕（計　5　件）
①田中孝信、音羽書房鶴見書店、「新聞広告とボーア戦争」(『英文学の地平―テクスト・人間・文化』)、2009 年 8 月出版予定
②田中孝信、アティーナ・プレス、「*The Household Narrative of Current Events* と 1850 年代前半のディケンズ小説」(『*The Household Narrative of Current Events* 別冊解説』)、2008 年、9-32 頁
③田中孝信、溪水社、「女性嫌悪―男たちの戸惑いと抗い」(『ギッシングを通じて見る後期ヴィクトリア朝の社会と文化―生誕百五十年記念』)、2007 年、273-289 頁
④中島廣子、清文堂、「ジュール・ヴェルヌにおける空想の都市」(『都市のフィクション―知の対流Ⅰ』)、2006 年、25-43 頁
⑤田中孝信、音羽書房鶴見書店、『ディケンズのジェンダー観の変遷―中心と周縁とせめぎ合い』、2006 年、434 頁

〔その他〕（計　4　件）
①田中孝信、近鉄文化サロン・大阪市立大学共催講座、《英文学を旅する》、2008 年 10 月－12 月
②中島廣子、近鉄文化サロン・大阪市立大学共催講座、《フランス街ものがたり―アール・ヌーヴォーの街―ナンシーとパリ》、2008 年 4 月
③中島廣子、日仏文化講座 CAF（神戸市教育委員会・神戸国際協力交流センター後援）、「光輝放つ魔都パリ―フランス十九世紀文学に見るパリ神話」、神戸国際会館、2006 年 7 月
④中島廣子、大阪市立大学市民講座、《フランスの光と影―消費社会の光と影》、大阪市立大学文化交流センター、2006 年 6 月

６．研究組織
(1)研究代表者
中島　廣子（NAKAJIMA HIROKO）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40047379
(2)研究分担者
田中　孝信　(TANAKA TAKANOBU)
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20171770
(3)連携研究者
なし